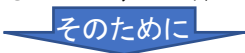


(様式1)

令和5・6・7年度「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」
学校改善プラン(2年次)【小学校】

【学校名等】

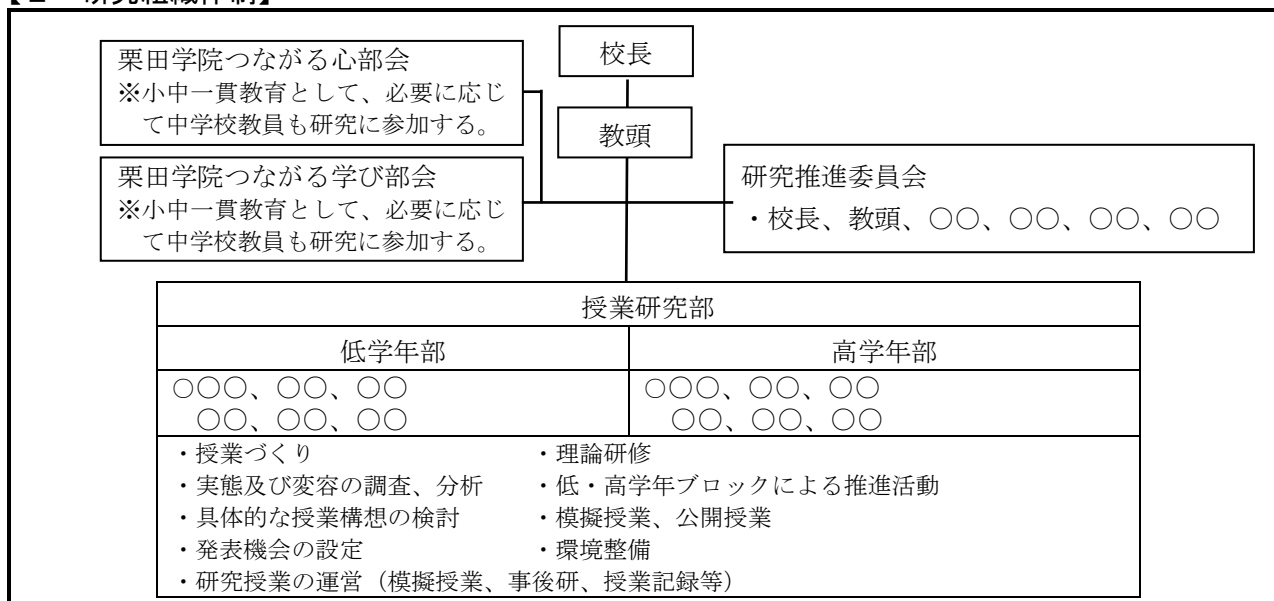
学校名	宮津市立栗田小学校							校長名	柴田 真樹
学 年	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特別支援	児童数	72名
学級数	1	1	1	1	1	1	1		
事業担当教員名	濱村 宗								
① 中学校区で目指す子ども像	栗田学院（小中一貫校） 目指す子ども像 （1）夢の実現に向け 自ら学ぶ子ども （2）お互いが認め合える 心豊かな子ども （3）健康で元気に生活できる子ども （4）ふるさとを誇り 地域に貢献できる子ども								
② 目指す子ども像	・学ぶことの楽しさを見出し、自分が立てためあてに沿って学習した様子を振り返り、次につなげることができる児童（主体的に学び考える力） ・各教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら知識を相互に関連付けてより深く理解したり、友だちと考えを形成したり、課題を見出して解決策を考えたりすることができる児童（新たな価値を生み出す深い学び）								
③ 目指す子ども像に対する現状と課題	<現状> ・指示されたことはしっかりやり切れるので、基礎・基本が定着している児童が多い。 ・目的をもったペア活動やグループ活動を取り入れたことで、自信をもって自分の考えを表現でき、話し合い活動の質が高まってきている。 ・素直で明るくのびのびと学校生活を楽しみ、学習に励んでいる。 ・自己決定する場を多く設定してきたことで、授業や学級での活動、特別活動等の中で自ら進んで活動し、達成感を味わっている。 ・昨年度の授業づくりの取組の成果として、毎時間自分なりの学習のめあてを立て、そのめあてに沿って学習し、振り返るというサイクルに慣れてきており、次への意欲をもって授業を終える児童が増えた。 <課題> ・自分の考えや思いを表現するだけで、友だちの考えや思いを受け止め、つなげて考えることができにくい児童もいる。 ・少しずつ自分の考えを話せるようになってきた児童については、聞き手に聞こえる大きさの声で話すことに挑戦しているところである。 ・これまでの学習スタイルであっても認知能力が高かった児童の中には、振り返りの質が浅く、自己調整をする必要性を感じていない児童もいる。 ・一人一人が主体的に学び取る授業を行うことによって、子ども自らが課題を見出し、解決策を考える力を付ける必要がある。 ・児童が学び取る授業を通して、コミュニケーション能力も伸ばす必要がある。								
④ 目指す子ども像に達するための仮説	○子どもが楽しみながら単元の見通しをもち、自ら学びを構想することで、主体性が高まる。 ○友だちと考えを形成することで学びが深まり、学力向上につながる。  ○子どもが学び取る環境設定を含めた授業づくり （意図的に子どもが考える環境を設定→主体性の向上） ・授業の中で新しい学びに気付く場面の設定（気付きギミック） ・課題にチャレンジする場面の設定（チャレンジギミック）								

令和6年5月1日現在

【1 研究主題】

主体性・挑戦意欲の高まる指導の研究
～子どもが学び取る授業づくりを目指して～

【2 研究組織体制】



【3 具体的な取組内容】

子どもが学び取る授業の実践・研究

- ア 低・高学年部での事前研を受けて、本時のねらい（認知能力と非認知能力の育成の場面を明確化）や研究主題に沿った参観の視点等を共通理解し、授業研究・事後研につなぐ。
- イ 研究の方向性を共通理解するため、授業研究で個々の児童の変容を見取り、本時のねらいについて協議することで教師の見取る力を高める。
- ウ 子どもが自ら課題を見付け、その課題を自ら解決する力を付けるために、課題解決型の学習方法や調べ学習等を取り入れる。その手立てとして、反転学習や家庭学習の内容を工夫する。
- エ 自分の学習を振り返り、調整する力を付けるために、自分で学習方法や学習量を変更したり調整したりできる授業展開（自由進度学習等）を取り入れる。
- オ 子どもが学習の見通しをもつために、子ども自らがめあてを立て、本時の認知能力や非認知能力の成長に気付く振り返りや次の学習につながる振り返りを目指す。

【4 仮説及び成果を検証するための質問項目】

学年	質問番号	質問項目	概念	備考
	46	まわりが反対しても、自分ができると思ったらやってみる。	目標に向けて取り組む姿勢	
	73	授業で新しく学習したことをこれまで学習したことと結びつけて理解したり、話合いで活かしたりしている。	精緻化	
	74	ほかの教科の授業で学んだことであっても、教科に関係なく授業中の活動で活かしている。	精緻化	
	79、85	国語（算数）の授業では、自分の思いや考えをもとに答えを見つけ出すような課題に取り組む機会がある。	主対深	
	80、86	国語（算数）の授業では、授業の最後に自分自身の学習内容を振り返り、学習目標（学習のめあて）が達成できたかどうかを考える機会がある。	主対深	

* 5・6の分析の項目は削除しています。

【7 分析結果を踏まえた指導改善、個に応じた具体的な手立て】

＜教師の指導力向上に向けた具体的な手立て＞

- 振り返りシートを活用し、子どもが目指す自分像を担任と共有・確認
 - ・中学校卒業時の目指す子ども像を全教職員で共有
 - ⇒小学校各学年終了時の子どもが目指す自分像を教員同士で共有・確認
- 2学期の授業づくり・取組方針の共有と定期的な振り返り
 - ・「子どもが目指す自分像」⇒各教員の「2学期の授業づくり・取組方針」の共有
 - ・毎月1回、校内研修で、実践の振り返りと方針の修正案を交流

＜個に応じた具体的な指導・支援方法＞

- 各学力調査等の結果分析による認知能力の実態把握と個々に応じた支援
 - ・6年：全国学力・学習状況調査
 - ・4～6年：京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート
 - ・2・3・5年：総合学力調査
- 学びのパスポートの結果分析を踏まえた支援
 - ・認知能力は高いが「目標に向けて取り組む姿勢」や「自己調整」が低い子ども
探究活動を通して学ぶ楽しさを実感できる授業
自ら課題を設定し、学ぶ意義を実感できる授業
 - ・非認知能力の自己評価は高いが認知能力が低い子ども
学習方法の確立（明確なゴールを提示し、計画表を基に学習・振り返りを行い、自己肯定感の向上を図る。）
 - ・現在値より少し高い目標の設定をしている子ども
乗り越えて自信をもてるようにする→今の子どもの状況の分析、把握
- 学びのパスポート「振り返りシート」記入後、担任と子どもが面談し、それを基にした支援
 - ・子どもの頑張りたい内容や学習方略の把握→それに見合った展開を計画
 - ・普段の個々の子どもの見取りに応じた適切な言葉かけ、評価→やる気の持続
 - ・個々の子どもの得意教科を把握→得意を伸長できる指導

＜集団としての具体的な指導・支援方法＞

- 子どもが主体的に学び取るための支援
 - ・子ども自身が学習の仕方を自己選択・自己決定（自由進度学習等）
→教師は選択できる内容を精選、準備する。
 - ・本時の学習内容の把握→学び取るためのめあて作り→めあてに対しての振り返り
→めあてや振り返りを書くための視点を与える。
→めあてや振り返りを交流する中での評価、質の向上を図る。
- 学習意欲を高めるための環境整備
 - ・自分たちでできたと思えるようなしかけ作り
（子どもたちの相互評価や教師からのその場での的確な助言、評価）
 - ・意図的・効果的なペア活動、グループ活動（話し合い活動の楽しさ、折り合いを付けること）
 - ・スタートラインをそろえられるような導入、スモールステップでの課題解決
（できそうもないと予想して意欲が下がらないようにするため）
- 心理的安全性が保たれる集団づくり
 - ・失敗が許され、お互いが認め合え、高め合える学級づくり
 - ・自己有用感の高まる学級づくり

【8 仮説の修正】

※分析結果を踏まえ、仮説の修正が必要であればここに記載してください。

○子どもが楽しみながら単元の見通しをもち、自ら学びを構想することで、主体性が高まる。

○友だちと考えを形成することで学びが深まり、学力向上につながる。

そのために

○子どもが学び取る環境設定を含めた授業づくり

(意図的に子どもが考える環境を設定→主体性の向上)

・授業の中で新しい学びに気付く場面の設定 (気付きギミック)

・課題にチャレンジする場面の設定 (チャレンジギミック)

そのために

○子ども自身が学びを振り返り、修正したり次の単元や他教科の学習につなげたりする。

・自分が立てるめあてや振り返りの質の向上

【9 具体的な取組内容の修正】

子どもが学び取る授業の実践・研究

ア 低・高学年部での事前研を受けて、本時のねらい（認知能力と非認知能力の育成の場面を明確化）や研究主題に沿った参観の視点等を共通理解し、授業研究・事後研につなぐ。

イ 研究の方向性を共通理解するため、授業研究で個々の変容を見取り、本時のねらいについて協議することで教師の見取り方を共有する。

ウ 子どもが自ら課題を見付け、その課題を自ら解決する力を付けるために、課題解決型の学習方法や調べ学習等を取り入れる。その手立てとして、反転学習や次の時間の学びにつながる家庭学習となるよう内容を工夫する。

エ 自分の学習を振り返り、調整する力を付けるために、自分で学習方法や学習量を変更したり調整したりできる授業展開（自由進度学習等）を取り入れる。

オ 子どもが学習の見通しをもつために、子ども自らがめあてを立て、本時の認知能力や非認知能力の成長に気付く振り返りや次の学習につながる振り返りを目指す。

【10 児童の変容（普段の様子から）】

・各時間のめあてを立てる際、これまでは自分が学び取りたいことを漠然と書いていたが具体的にになり、振り返りでも学習内容についてや学び方についてなど、何ができるようになったのかを明確に書けるようになってきた。

・中・高学年を中心に、めあて・振り返りを一人一人が書き、ロイロノートで共有している。めあてを共有することで友だちが書いた内容を参考にしながらめあてを立て、その日に学ぶことを個々が意識することができるようになった。そして、振り返りを書くことで、自分自身の学びを整理することができている。さらに、早く書き終わった児童は友だちのめあて・振り返りを読むことが習慣化され、振り返りの質が高まり、自己調整力の向上も見られる。そして、次の学習の学びへとつながっている。

・特別活動でも、児童一人一人が取組のめあてをもてるようになってきた。高学年は取組の中で振り返りを共有し、時には軌道修正しながら次の取組へとつなげることができるようになってきた。

【11 3年次の研究構想】

- 子どもが自ら学び取る授業づくりの研究の継続 ～自分で考え決定し、行動する児童の育成～
 - ・子どもの意思決定できる場の設定を大切にした授業づくりを継続する。
 - ・単元を通した学習の見通しを子どもがもち、自らがめあてを立て、学習を振り返る。
 - ・子どもが考える環境づくりを意図的に仕掛ける。(気付きギミック、チャレンジギミック)
 - ・自己調整力を育成するための授業を仕組む。(反転学習、自由進度学習等)
 - ・自分の現状を把握し、今の自分に適した家庭学習を実行できるように仕組む。
- 学びのアウトプットを重視
 - ・1時間の授業の中で自分や他者との対話活動を取り入れ、アウトプットする機会を設定する。
 - ・全学級で朝のスピーチに取り組む。そのテーマを数日前に決定し、スピーチに向けての準備を家庭学習に組み込むことで、自己調整力の育成も図る。
- キャリア教育の視点を大切にした教育活動
 - ・小学校で様々な内容を学び取ることの必要性を児童に考えさせ、1年後の自分の姿、卒業時の自分の姿を意識の中にもたせる。
 - ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」をベースとして、「目指す児童像」を再検討し、達成するための「教師像」、「授業像」を校内で明確にし、共有していく。
- 認知能力の伸びの把握と検証
 - ・学力ステップの伸びと非認知能力の相関関係から学年や個の特徴・傾向をつかむ。
 - ・効果的な学習方法を見つけ、個に応じた指導を行い、学力ステップの伸長を目指す。